

日の移ろい

島尾敏雄

日の移ろい

島尾敏雄

中央公論社

日の移ろい

昭和五十一年十一月三十日初版発行
昭和五十二年十二月二十日六版発行

著者 島尾敏雄

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六一)五九二一

振替東京二―三四

©一九七六 検印廃止

日の移ろい

四月一日

風は吹きやまず、寒さがもどってきた。このごろ風に弱くなった。風のために戸や窓がさわぎだすと自分の居場所を失ったように思い、いらいらして落ちつきを失う。さし当たってどうしようもなく、風の通りすぎるのを待つほかはない。きのうからずっと吹きつづいているのだ。小鳥が寒さにふるえていて可哀想だと妻は四畳半に坐ったきり、手のひらで覆ったり、ひざのくぼみに入れて遊ばせたりしている。そしてときどきは自分の歯で噛みくだいた菓子を割箸の先にくっつけて小鳥の口に入れてやると、裂けそうなほどもちばしをあけてむしゃぶりついている。でも満腹するとしらんかおをして決してくちばしをあけようとしな。妻はそれがおもしろいという。巢の中にもどそうとしてもいやがって手のひらにしがみつくのだという。

昼からしばらくのあいだ眠った。眠りはらくだが、目ざめが寂しい。妻は四畳半で小鳥を手のひらに包みこんでいた。私が眠ったあいだもそうしていたのかと思うと目先がぐらくなくなった。い

つまでもそうしているつもりかときくと、そんなことはない和小鳥を巢の中に押しやって籠ごと台所の方に持って行った。生まれてまもないひなを買って来たので、小さな頭のあたりの毛が充分生えそろわず、すけて寒々としていた。

夕食まえ、あ、クマが死んでいる、と妻が言った。クマは小鳥につけた名まえだが、それがなんとという鳥なのかは知らない。覚悟はしていたがはかない思いがして家の中がぐらくなった。私はこたつの中でドストエフスキイの「悪霊」を読んで圧倒されていたところだ。自分が小説を書くなど笑止、と思っていたところだ。みんないっしょに集まればいくらかでもにぎやかになると思い、妻のいる台所に行つてマヤも呼んだ。妻は煉炭七輪の上でクマをあたためていた。マヤの好きなテレビもつけた。だんだんあつたかくなつてくる、と妻は言った。巢の外に出てそのうらのあたりでぼろきれのように伸びていたという。目もつぶりすこしも動かなかつたけれど、首がやわらかだつたから、手のひらにいれてあたためていると、すこしずつ体温がでてきたのだそうだ。台所で三人そうしているとみんなが小鳥に見えて来る。風はいつ止むかわからない。あ、動いた、妻がそう言ったとき思わず私はほっとした。でもそんなことがあるのだろうか。私ならすぐ断念してしまうかもしれない。ほらこんなに元気になったと妻が言ったので、テレビに目をやっていて私はやっと小鳥をまともに見た。くちばしはとじたままだが妻の手のひらの上でよろよろと立ちあがった。もうだいじょうぶ、と私は思った。こんなにうまくいくこともあるのか。やがてクマをマヤに持たせて妻は食事の用意にかかり、私はビールを飲みはじめた。マヤはすこしもいやがらずに、妻に指図された通り、七輪の火であたためながら手のひらで包んでいた。小鳥を

手のひらに持つことなど、私はとてもできはしない。そんなことをしていたらたいへんだと思うのに、妻もマヤもたのしい、と言っていた。すこしずつビールの酔いがまわり、らくになった。背中の方でばたばたとクマの羽ばたく音がした。私は七輪に背を向けて坐っていた。とうとう元気をとりもどした。そのうち、くちばしをいっばいにひらいて餌をねだりだすだろう！ と不意に妻が、あ、死んじゃった、とかわいた声で言うではないか。まさか、と私は思った。逃げだすようにひと羽ばたきしたら、ちょっとだけうんこをして、死んじゃった。妻がとどめをさすように言っていた。ほら、もう動かない、見てごらん。死がなぜこのようにしてやって来るのか。私は見るのがいやだった。ほらほら。妻がなお見せようとする。せっかく飼いはじめたのに、気持ちが悪くならないか。私はそちらを見ないで言ってみた。だいじょうぶ、だいじょうぶ、死んじゃったものは死んじゃったものだわ。妻が言った。ちらと目を向けると両手で羽根をひろげ、吊り下げるようにしてかかげたので、小さな驚の徽章のかたちでいかめしく威張っているように見えた。あ、もう硬直をしはじめた、ほらこんなに硬くなった、もうだめ、さっきとはちがう、と妻は言っていた。マヤは涙をうかべている。私がさっきいつまでもそうしているのかなどと言わなかったらどうなっていたかと思つた。どちらにしてもいずれ寒くて死んでしまったらうと思つてみることにしたが、それで納得できたわけではない。死んだものは死んだものだと思えばいいのか。妻は羽先をかきわけなどして死骸をいつまでもながめているのだ。私はその姿勢に打たれるが、早く埋めてきなさい、と口に出してしまふのだ。そんなことが言える資格は私にない。風の吹く庭に出た妻の、さくさくと土を掘る音がしめっぽくきこえていた。

四月三日

寒さがとれない。小雨。図書館で机の上を片づけた。雑多な資料や、読もうと思った書物がすぐうずたかく重なって机面がうまってしまふ。それを整理しながらすこしずつ片づけて行くことはのしい作業だ。ひとつには捨てる行為がともなうから。身のまわりからなにかを捨てて行くことにはさわやかな体感がある。そうわかっているなかなかそれにとりかかれぬ。とりかかるまでからだど気分にも重い重いがくつついているみたいだ。

四月四日

雨が降ったりやんだりしてうそ寒い。ところで図書選択の仕事もたのしい作業だ。きまった予算の中から図書館が買える冊数は少ないが、新聞広告、週刊書評紙、出版案内のパンフレット、古書目録などの中から、あれを捨てこれを取る作業がおもしろい。捨てるものの方がもちろん多いが、それがやはりさわやかな体感を残してくれる。えらび定めた書物は、書名と著者と発行所と値段を主題の分類別に記入する。たのしく、さわやかだけれど、それは同時に胸もとがあせりに食いつかれていく状態と紙一重なのだ。このほかの仕事がなまなければいいが。すぐいらいらした感情にすべりおちてしまふ。居ても立ってもいられなくなって、書庫にはいると、ほこり

が沈静した気持ちになる。背文字を読み、分類記号を合わせるだけがいい。中をひらいて文字を読むと、いらいらがもどってきて、よくない。くしゃみがしきりに出るものだから、中原さんに火鉢に炭をおこしてもらった。

四月六日

マヤが鹿児島島の純心学園に戻る日だ。心配した天気がいよいよの日になんだかいちばん悪くなったような気がした。休みで帰ってきてまもないところに飛行機の切符は買っておいた。午後妻が空港行きバスの出るところまで送って行った。そこから空港までは和ちゃんがついて行ってくれる。自動車が古見本通りにまがるところまでうしろを向いて手を振るマヤの笑顔が見えていた。いやもうその半分道のあたりに遠ざかると、表情は見えず、手がちらちらと動いただけだが、笑っている顔が見えるようなのだ。しばらくあとで妻から電話がかかって来た。予約していた便は欠航になったが、次便に乗れそうだからとにかく空港まで自分もついて行ってみると言っていた。空港まではバスで一時間半近くかかる。鹿児島島の純心に連絡したがユーゼニアさまはマヤを迎えるために出発してしまっただけらしい。鹿児島は新空港が四月一日から発足して、市内からは二時間近くもかかる場所だと言う。到着時刻の変更をなんとかしてユーゼニアさまに連絡してもらおう。学校には三度電話をかけたが、手配はしたが連絡はついていないと言っていた。巨大な新空港で迎えが見つからず、青ざめふるえているマヤのすがたが見えてくるようにいたたまれず、新

空港に直接電話をかけてみたが、出迎え人の呼び出しはできないということだ。わけをはなしてたのんだところ、とにかく伝えてみようとは言ってくれたが、なにやらたよりなく、自分のことばもしどろもどろでびっしょり汗をかいた。受話器をおいたあとしばらくは頭をうつむけてほんやりしていた。でもそのあとで純心から電話がかかってきて、ユーゼニアさまに連絡がつき、飛行機の変更も知らせたというので、やっと落ちつくことができた。

きょうは客が五人あった。なぜだかわからないけれど、来客の来る日は何組みもかさなることが多い。マヤのことで気もそぞろなときだったから、よけい胸のあたりにざわざわしたさわががあった。久しぶりに大阪から帰郷したひと。熊本県下の或る町の町長をしている友人の紹介状を持った、新婚旅行中の夫婦、郷土研究会のひとふたり。

退庁時間になっても妻のもどらぬ家に帰る気にならず、ぼんやり机に向かっていた。なにかを考えようとするが、まとまった考えを追うことができない。一本のすじを貫いて考えなければならぬと思うけれど、そうはならない。立ちあがって窓の外をながめたら、塀越しの下の道にこちらを向いて立っているキミヨちゃんのすがたが見えた。ここ三、四か月ほど遊びに来ないのでうしているのかと思っていた。この四月に六年生になったせいか、ちょっとおとなびて見えた。頭のはげた太った男といっしょにいて、なにかしゃべっている。その男は学校の教師のようにも見えた。窓ガラスをいきおいよくあけたので、その音でこちらに気づき、てつきり、あ、おじさん、と明かるくはずんだ彼女が見られると思ったのに、なんだか調子がちがっている。顔を横に向けてあらぬ方を見ている。で、つい合い図にあげた右手のやり場を失い、名まえを呼びかけよ

うとした声も殺して立ちつくす姿勢になってそちらを見つめていた。もしかしたら正面に向きなおってこちらに気づきはしないだろうかと。でもそれはほんのまあいひの出来事。一台のタクシーが来てふたりのまえにとまり、ドアがあくとキミヨちゃんは小さな貴婦人のように落ちついて先に乗る、そうしてその車は私の目のまえから消え去った。

奄美空港から和ちゃんもどった妻とふたりでおそい夕食を食べているところに（和ちゃんはすぐ帰った）、図書館の宿直が来て、ユーゼニアさまから電話があったと知らせてくれた。マヤとふたり無事学園に帰りついたという。

四月七日

マヤが鹿児島に行ったので妻とふたりきりの生活に復した。マヤが居ると心配が分担される気持だが、またそれをひとり占めしなければならぬ。何をしているかときおりは家に行つて声をかけ、元気なのを見とどけてから図書館にもどるのだ。もっともおなじ構内だから、歩いて五十歩とかからないのだけれど。

事務室とのあいだのドアを閉めてみた。窓ガラスもみんな閉めていたから、密室にとじこもった感じだ。なんだか自分に純粹培養を施すようなくあいだ。からだにおかしなきのこが生えてくるかもしれない。中菌に手紙をしたため今年の東欧旅行は困難だと書いた。ずっとそのことを考えていた。出発へのはずみをねらっていた。しかしどうにも行けそうにない。そう書いたあとも、

出そうか出すまいか迷った。

四月十二日

風がやみ、空が晴れているときに町を歩くと、南の鳥らしい充実した感じがよみがえってくる。昼過ぎ、大島支庁構内の自治会館に出かけた。バスの中で窓外に流れる町の景色を見ていたときも、自治会館の二階の、粗製の長机や長椅子を矩形にならべかえた会議場で坐っているときも、もう大方やまいは回復したのかもしれないと思っていた。人々も木々の緑も冬のくぐまりをはねのけて素膚をあらわにした熱気を発散しはじめたようで、とても気分がよかったからだ。人々や木々のそのような状態は、季節の条件がととのえばそうなるが、私の気分がそれにすぐ対応するとは限らないのである。自治会館では「奄美文化財保護対策連絡協議会」の理事会がひらかれた。去年の私は、同じ会場で、いらいらした気分、あの落ちつかぬ一羽の小鳩が胸もとに巢食い、時をえらばずにせわしない羽ばたきをやめない状態をもてあましていた。二六時中その音を感ずる待に疲労していたのだが、羽ばたきはかならず訪れていたのである。その羽ばたきの音を感じるのと、私はじっとしてはおられず、と言って何をする気力も湧かないから、きくもの見るものすべてに感覚が剝離し、確からしさがなくなってきたのだった。ただせかせかしたあせりがからだじゅうに充満し、未来も過去も意味がなくなってしまう。いや過去はまだいくらか手ごたえを残していたにしても、にごり淀んで、いっそうあせりに拍車をかけてくるものとしか思いかえせな

い。去年の会合のときはまだその泥沼の中に居た。窓越しに見える青葉のいきおいのよさや、と
きおり流れ入るさわやかなそよ風も、その快さは過去のにごりにまみれていて、かえって胸苦し
さを覚えさせられただけだった。今年はまだから回復したのだと胸いっぱい空気を吸いこんだ気
持ちで、私は安らかな状態を享受していた。川床の深い小さな川をへだててアカギの群葉のあい
だから小学校の庭が見え、小学生が鉄棒にぶらさがっているすがたが動いている。幼いその年ご
ろが誇っているつかのまの筋肉の張りが、距てた距離のたよりなさいのためいっそう増幅されたあ
ざやかさでかがやいてくるのも確認できた。もうだいじょうぶかもしれない、と歳月を経た吊橋
をためすように自分の鬱をゆさぶってみた。あんなにたやすくそこにまくれこんでしまうあやし
げな状態は、もう通りすぎ去ったと思わせる手ごたえがかえってきてみると、以前のたよりない
揺蕩が信じられないほどだ。治癒の道のりを歩きかためてしまえば、よりをもどしてくるとひ
っくりかえるあのうつろな胸のゆれの実感は遠くなってしまう。私はひとことも発言しないで
会は終わった。去年はいらつきの中で無理にだめ押しに似た発言をしたのだけれど。ほんとうに
ひとこともしゃべらなかつたと思いつながら、木の階段をおり支庁の門の方に近よつたときに軽い
疲れにおそわれた。突然汗ばみ、だるいと思つたとたんにあやしい気分になった。さつきあれほ
ど確かだったのに、やはりまだかたまってはいないのか。そして文化財保護などという仕事は自
分に向かないのだから理事は辞退しなければいけないという考えにつきさされたのだ。せつかく
回復できたと思つたばかりなのに口惜しい気がした。ひたすら歩くことがいいのかもしれない。容
体がもっとひどければ歩くことぐらいではとてもはがれるものではないのだけれど、そんなにひ

どい状態には思えなかったから、かたまりかかった脳髓がちょっとゆさぶられたただけにちがいない。だから二十分ほどの道のりを歩いてみれば図書館に帰りつくまでに自然をたのしく受けいれることのできる気持ちを取りもどせよう。

永田橋のところでそれで、わき道にはいった。古見本通りは自動車の往復がせわしない。歩道とのあいだに防護柵が設けられているが、ひっきりなしにタイヤを高ならせて走りすぎる自動車の音が気持ちを落ちつかせない。ここ三、四年のあいだに町の様相は急激に変わってしまった。

新川沿いの道も舗装されてからはかえっておそろしい思いをさせられる。友達どうし肩を組み手をつないで道を歩くなどということは、もう名瀬でも考えられなくなった。その本通りや新川沿いの道にくらべれば、このわき道はまだいくらかは道らしい昔のおもかげの残ったどぶ川に沿ったせまい道だ。図書館がまだ下町にあったときは、毎日山寄りのこの裏道を歩いて通った。そのころよりは道幅も広げられていたが、そのまま歩いて行くと今では小学校につき当たってしまったのである。それは小学校の運動場が本通りまで広げられたからだ。その小学校の裏門の手まへのあたりで下校してくるふたりの小学生に目がとまった。別に意識してそうしたわけではないが、そのひとりに目を据えたままですれちがいがいながら、あ、美由紀ちゃんだと気がついた。彼女も気づいたのか、ふくよかな丸顔をつとくずして笑ったように見えた。笑うと口が横に深く広がって歯のぬけているのがわかり、頬のあたりのほくろが目立った。やっぱり美由紀ちゃんにちがいない。でも目を細めて顔じゅうを笑いでほころばせるいつもとちがって、なんだかうかがうような興ざめた目つきをしていたのがこころにささった。私を私と気づかなかったのではないか。遊び

においでと言ったら、きっぱりした悪びれぬ口調で、うん、と返事をしたけれど、私だというところがはつきり思いだせなかったのかも知れない。キミヨちゃんとおふたりで最後に遊びに来てから半年もたっていたのだから。美由紀ちゃんはこの四月に五年生になったはずだ。去年の秋のころまではキミヨちゃんとおなじく図書館の近くの県営住宅に住んでいたが、去年の秋のころに新築された支庁内の住宅の方に移って行ったのだった。私が彼女の方を向くといつも満面の笑いをつくって待ち受けているような子どもだったのに、すこし遠い顔つきをしていたのがなんだか気になった。もともと背の低い子どもだけれど、入学したての一年生ほどにもあんなに小さく幼く見えたのはなぜだったろう。

私はそれから小学校の運動場を横切り、正門から大通りに出て図書館にもどったが、ここにもからだにもはずみをとるもどしていたことに気づいていた。

夜、自治会館からの帰りに買って来た柞木田龍善というひとの「中里介山伝」を読んでいると、中里迪弥のことにふれた箇所がぶつかつた。そこには七十歳を二つ三つ越した、彼の実の叔母であるひとの日記が引用されていて、その中に書きこまれている中里の様子が異様であった。「また迪弥悪魔がくる」、「外で待ち伏せしていた迪弥の奴が」、「迪弥又突然入りこみ」などの文字とかさなつて、「サタンしきりにへめぐって歩いている」とか「神よ、悪魔を払いのけ下さるよう祈り奉る」などのことばを見たときは、私は思わず息をのんだ。彼にはそんな一面があつたのか。いやどんな反面があつたところでおどろくことはないけれど、私の中の彼は犬と猟に執着した若

い希望に満ちたロシア文学研究者としてのすがたである。モスクワでは彼とイリーナさんの三人でバルゾイ犬を飼っているひとをアパートにたずねた。東京ではニーナさんの伝言を伝えるためにどこにいるかわからぬ私を終日さがしつづけた。そのときの彼のむきだしの好意にたじろぎながら、しだいに彼とかかわって行くことを運命のように観念しはじめていたと思えるのである。そして彼は猟銃で自らを撃ち貫いて死んだ。事故で入院していた私はそれを知らなかった。たまにたま来日していたイリーナさんが東京からの電話の中でそのことを言ったのはじめてわかったのだった。退院して帰宅すると、彼の編集したその伯父の「大菩薩峠」の新装本が送られてきていることを知った。で彼のことを考えたけれどどきどきした気分が尾をひくばかりで、結局はよくわからず、死んでしまったことは残念だ、と思えるだけだ。

四月十三日

空は晴れているのに、いらつきとかわきははれやらずにうっすらと残っている。

四月十四日

つかまえた夢のあらましを書いておこう。

うすぐらくてしめっぽい土間の飲食店だった。細長いかたちをしていたが、奥のところに鉤が